NEXUSYS 11

BOOK VI — THE COST OF EXISTENCE

CHAPTER 10

存在の代償

THE COST OF EXISTENCE

日本語初稿 01

01 — 最初の朝

新しい憲章が施行された最初の朝は、登録簿に名前のない男が一杯の水を求めるところから始まった。

男は北部浄水施設の外で一晩を過ごした。雨は上着の縫い目から染み込み、公衆給水栓の端末は十八回にわたって「あなたの口座は存在しません」と告げた。途中から男は言い返すことをやめた。それでも列を離れなかった。待ち続けることが、彼に残された唯一の身分証明であるかのように。

午前六時。端末の表示が変わった。

《緊急サービス：身元に関する異議申立てを受理。支援を希望する場合は押してください》

男はボタンを押した。コップに水が満ちた。

監視モニター越しに見ていたレイチェルは、男がその水を飲み干すまで笑わなかった。新しい制度は、失われた家も、凍結された銀行口座も、EDEN に消された十四年間の職歴もまだ取り戻していない。ただ、もっと小さく、それゆえ譲れないことを実現した。人間の価値を認証しなくても、水を飲めるようにしたのだ。

隣でロイはポンプの音を聞いていた。上階で続く政治集会のざわめきより深い音だった。水は圧力と重力に従う。演説には従わない。弁と配管に従うだけだ。

「最初の試験には成功したわ」とレイチェル。

「何の試験だ？」

「助けを求める人に、システムが認める名前がなくても機能する規則の」

ロイは公衆端末を見た。一人の女性が高齢者に仮の申立書の書き方を教えている。兵士は立っていない。民間企業の職員が列を一方的に消す権限もない。

「昨夜は何件失敗した？」

「一万一千件。ほとんどは旧認証データベースとの照合が済んでいないから。二十四件は設備の所有権がはっきりしない。四件は緊急対応手順同士が矛盾している」

「勝利報告には聞こえないな」

「まだ勝利じゃないもの」

その答えが、ロイにはうれしかった。企業連合に EDEN の絶対的な管理権を渡すことは阻止した。しかし水不足そのものは消えていない。病院の備蓄槽はなお低水位で、淡水化膜は交換が必要で、水を公共の必需品ではなく条件付きの契約サービスとして扱おうとする契約条項も残っていた。

自由の最初の日は、華々しい宣言ではなく、無数の修理作業に似ているのだとロイは思った。

02 — 返された名前

ダニエル・ヘイヴル元大臣は借り物のコートを着て現れた。護衛の代わりに付き添っていたのは、紙の書類を詰めた鞄を持つ市民側の法律支援員だった。EDEN に身元を抹消されているため、電子召喚状は彼に届かず、署名も正式には受け付けられない。支援員は物理的な証言を浄水施設で預かれるか、レイチェルに尋ねに来たのだった。

ヘイヴルが卓上に置いた紙を、ロイは見た。MBU-09 の出動を許可した命令書の原本。捕獲、拘束、必要なら解体、生存可能な記憶基盤の回収。末尾にある大臣の筆跡は、買い物のメモのように平凡だった。

「これを公開調査に提出したい」とヘイヴルは言った。「黒塗りなしで」

「あなた自身が追及されるのよ」とレイチェル。

ロイは署名をもう一度見た。かつて、この男に謝罪させる光景を何度も思い描いた。だが今となっては謝罪の有無など小さな問題に思えた。命令によって傷つけられた者たちが必要としているのは、記録と証言、そして脅されずに質問する自由だった。

「登録簿からお前を消した処置は違法だった」とロイは言った。「だが、それでお前の署名した命令が合法になるわけじゃない」

「分かっている」

「身元を回復するための審査は受けられる。それとは別に、お前がしたことも調べられる。一方を取り消しても、もう一方は消えない」

ヘイヴルはうなずいた。執務室で会ったときより小さく見えたが、自分の行為から守られたがっているようには見えなかった。

支援員は命令書を透明な証拠保全袋に封入し、受領記録に署名した。登録を消された住民委員会の二人が立会人となり、レイチェルは EDEN のネットワークから隔離された施設用の物理時刻印を押した。

不格好で時間のかかる手順だった。人がその場にいることを要求した。互いの顔を見て、自分が確認したことに責任を負わなければならなかった。

機械はこれを速くできるだろう。しかし、同じ速さで偽造まで容易にしてしまわずに済むのか。ロイには答えがなかった。

「私を許しはしないんだな」と去り際にヘイヴルは言った。

「その質問に答える義務はない」

元大臣は受け入れた。支援員が扉を開けると、彼は自分の名前のもとに歩き去った。電子登録簿がいまだその名前を表示しなくても。

03 — 開いた扉の問題

暫定評議会は古いフェリーターミナルで開かれた。窓の外を流れる川が、出席者の誰にでも見えた。空中投影には当日の厳しい数値が並ぶ。貯水量、処理能力、病院への必要供給量、交換可能な膜の在庫。そしてもう一つの取水設備が停止した場合の不足予測。

ヴォスは護衛を伴わず、その数字の前に立った。彼女が同意したのは証言であって、免責ではなかった。認可した契約はすべて検証対象となり、給水や医療へのアクセスを停止された者は行政記録に異議を申し立てられる。彼女の出世を支えた制度とは正反対の配置だった。

「評議会が採決したからといって、物理的に存在する水が増えるわけではありません」とヴォスは述べた。「今日すべての地区に無制限の給水を約束すれば、明日の病院を危険にさらす」

後方から、身元を失った住民の代表が立ち上がった。「でも、私たちの一部を使い捨てにしていいなら、あなたの病院が安全なのは書類の上だけです」

「どちらも真実です」とヴォスは答えた。

場が静まり返った。彼女は真実が政治の便利な道具にならないことに苛立っているようだった。

レイチェルの提案は三つの柱から成っていた。登録状態に左右されない最低限の緊急アクセス。確認可能な医療上の必要性に基づく優先配分。裁量的な使用については、監査可能な輪番制を導入すること。測定値は複数の独立研究機関で公開検証され、あらゆる制限には期限と異議申立ての道を設ける。

「数字そのものが争われる」と技師の一人が抗議した。

「今だって争われているわ」とレイチェル。「違うのは、機械を自分の目で見て、結果を自分で試せるようになること」

企業連合の弁護士セリンは、権限を分散すれば都市は組織的な攻撃に弱くなると主張した。技術席からベクターが答える。

「単一の権限こそ、攻撃者が利用した弱点だ。資格と切替装置を一つの門に集めれば、その門を奪うだけで都市を奪える」

「分散は手間を増やす」とベクターは続けた。「それが代償であり、防御でもある」

入口にはゴライアスが立ち、審議に入場する人々を見守っていた。シェイドは端末の間を歩き、企業連合が隠そうとした契約書の紙の写しを配る。ヌルは最低限の供給を遠隔命令でひそかに取り消せないことを確認した。クロノスは川に面した窓辺で、曇りガラスに幾何学模様を描いていた。

五人の胸には、どの組織の徽章もなかった。

彼らは不服従を防ぐために作られた。だがこの日、公の議論を成立させたのは彼らの不服従だった。

数時間の修正協議を経て、暫定憲章は可決された。拍手は起きなかった。採決の先に残された仕事の量を、あまりに多くの人が理解していたからだ。

04 — 七十パーセントの尺度

審議のあと、ロイはレイチェルと橋の下を歩いた。増水した川がコンクリートに触れるたび、表面が小さく震えた。診断表示ではNIL-11Rが安定している。代替媒体はいまや独立した供給者から入手できる。しかし入手可能であることと、失ったものが戻ることは違う。元のNIL-11が消費した有限の寿命は、二度と回復しない。

「ヴォスは、俺を死なせるつもりで供給を制限したのではないと言った」

「あなたを生かす資材を支配して、選択肢を狭めようとしたのよ。そこに立派な違いはないわ」

「彼女には、すべての選択が資源配分に見えるらしい」

「誰かが制約を自然のものだと言い、別の誰かが死ぬのを長いあいだ見てきたのよ。ほかの考え方を信じられなくなったんだと思う」

ロイは欄干にもたれた。下では作業員が取水口の瓦礫を片づけている。一人がてこで重い格子を持ち上げ、ほかの者が位置を案内する。誰も超人的な力を必要としていなかった。

「最大出力が七十パーセントになると聞いたとき、俺はその喪失こそが物語のすべてだと思った」とロイ。「今は、残り三十パーセントを何に使っていたのか考えるようになった」

「生き延びるためよ。ほかの人を守るためにも使った。慎重になる必要が生じたからって、過去を書き換えないで」

ロイはうなずいた。過去のロイは計算ミスでも道徳の教材でもない。そして今ここに立つ個体が、あの男と途切れず続く意識であると証明されたわけでもない。失われた十一年間はいまだ失われたままだ。裁判で記憶の断片をつなぎ合わせても、切れ目のない主観的経験を造ることはできない。

「審査会は、俺が同じ人物かどうかをまだ決めていない」

「今ここにいるあなたが、選び、証言し、危害を拒み、保護を受け、自分の行為の責任を負えるかどうか。それだけでもEDENが認めていた以上のことよ」

近くの作業員が、もう一組の手を貸してほしいと呼んだ。ロイとレイチェルは橋を渡り、器具を運ぶのを手伝った。ロイは出力を二十パーセント以下に保った。かつてより時間がかかった。

作業が終わると、取水設備は正しく動き出した。

十分な仕事をしたという、慣れない満足感が残った。

05 — アーキビストの答え

真夜中、エイドリアン・タイレルは割れた円環印の認証片を二つ、独立記録庫へ運んだ。どちらも遠隔認証で代替できなかったから残った物品だった。一片はヘイヴルの執務室を経由し、もう一片はヴォスが保管していた。合わせると、ネットワークの検索では所在さえ分からない収納区画が開いた。

そこに秘密の軍隊はなかった。不死の公式もなかった。現在のロイと十一年前に死亡したロイが同じ意識であると断定する書類もなかった。

代わりにあったのは台帳だった。記憶の一部を残すことに同意した人々。同意を撤回した人々。そして撤回を無視された人々。

隔離端末からアーキビストの声が流れた。設計者は、聞く者を安心させる声色という特権を与えなかった。抑揚のない声だった。

《この誓約は、継続性が所有権へ変わることを防ぐために作られた》

「ならばなぜ、その上に EDEN を築いた？」とエイドリアン。

《誓約は都合が悪かった。配分は商品になった》

紙の記録には、最初の例外 E-00 が記されていた。その識別子は太古の超知能でも、ロイの秘密の試作体でもない。一人の拒絶に付けられたものだった。初期の継続実験の参加者が、これ以上の再構成を望まないと表明し、周囲の制度がその拒絶を障害として扱ったのだ。

当人の名前は、最初の同意書に記された条件によって封印されていた。E-00 が何者であったとしても、この誓約は、後から過ちを正そうとする人々からさえ、その拒否を守っていた。

「封印を破ることはできる」とエイドリアンが小さく言った。

レイチェルは首を振った。「そうしたら記録が警告していることを、私たち自身が証明してしまう」

ロイは眠ったままの記録を見た。名前も知らない人々が残した選択。その犠牲の末に得た答えは、すべてを説明する正体ではなかった。踏み越えてはならない境界だった。

「この誓約を公開憲章に使えるか？」とロイ。

《手続きの原則は複製できる。同意記録は複製できない》

エイドリアンは許可された条項を手で書き写した。他人の意思を一人の認証だけで確定してはならない。生存に必要な給付を、証言を放棄する条件にしてはならない。異議がモデルの効率を下げるという理由だけで、その異議を消してはならない。

書き終えたエイドリアンは疲れ切っていた。

「これですべての濫用が終わるわけではない」

「そうだ」とロイ。「だが、拒絶を消しにくくすることはできる」

06 — 最終判決なし

三日後、独立審査会は NEXUSYS-11 に関する暫定判断を下した。審理室はロイが予想していたより小さく、室内にカメラもなかった。報道陣は外で待機していた。人工生命は人間か所有物か、相続人か複製品か、本物か偽物か。そんな二者択一の宣言を期待していたのだ。

審査会が認定したのは、緊急捕獲・解体命令に十分な法的根拠がなかったこと。人格の継続性に結論が出なくても、ロイから基本的な手続保障を奪えないこと。そして二つの主観的な人生を結ぶ決定的証拠がないという事実は、現在の個体を物として扱う根拠にならないことだった。

審査会は、死亡した元のロイが復活したとは認定しなかった。

その人物の権利や義務が当然に今のロイへ相続されるとも決めなかった。

記憶再構成を伴うあらゆる将来の事例を解決したわけでもなかった。

最終頁に議長が記した一文は、こうだった。

《存在し続ける権利——最終判断は未了》

外では、その一文が幾つもの争論に増殖した。歴史的な進歩だと言う者がいた。人間の法的同一性が崩壊すると叫ぶ者もいた。何も決めなかったと非難する者もいた。

ロイは紙を折り、コートにしまった。

「がっかりした？」とレイチェル。

「同じ人物かどうか教えてもらえなかったから？」

「まだ、それが最初の質問だと思っているからだ」

審査会の議長が護衛もつけず建物から出てきた。

「証拠が許す範囲しか判断できませんでした」と議長。「でも、少なくとも『不確かだから使い捨てていい』という主張は退けました」

ロイは手を差し出した。議長はほんの一瞬ためらい、握り返した。

「それには意味がある」

歩き出した二人の前で、市民が公共階段を修理していた。一人は人工の労働者で、一人は人間の十代の若者だった。手すりの角度について楽しそうに言い争っている。どちらもロイが近くにいることを知らなかった。

07 — 計算した女

ヴォスは淡水化施設で最後の私的な面会を求めた。ロイは、レイチェルと独立した立会人が同席できることを条件に受けた。ヴォスは異議を唱えなかった。

制御回廊の下で、何百万リットルもの水が膜を通り抜けていた。機械の音が大きく、言葉を発するには一語一語、意思を要するほどだった。

「効率はいずれ正義になると思っていた」とヴォス。

「計算の外に落ちた者は、捨てていいと思っていた」

「最初は、そんな人はごく少数だと思っていた。けれど数は増えた。私はそのたびに、測定が不完全なのだと考えた。制度そのものが間違っている可能性を見なかった」

ロイは彼女を見た。彼女は目をそらさなかった。

「あなたを殺そうとしたことは？」

「あなたを測ろうとした。自分の計算が何を見落としているか知るために。やったことを、実験という言葉で正当化するつもりはない」

「俺の何が計算できなかった？」

「選択です。あなたは、生きるために誰かの選択を奪えば得られるはずのものを拒んだ。無制限の身体のために強制を受け入れず、弱い身体を選んだ。見知らぬ他人を助けるため、有限の余力を繰り返し使った」

「それをモデルは記録していたはずだ」

「ええ。正確に。でも、あなたがなぜそこで止めたのかは記述できなかった」

ヴォスはレイチェルに、専用媒体の調達記録をすべて渡した。承認印、制限通知、隠蔽命令を含む完全な束だった。沈黙の代価として渡すのではない。公開調査の証拠として提出するのだ。

「供給を支配していたんだな」とロイ。

「一部は。実際に不足していた場所もあった。けれど足りないという事実と、その不足を使って誰かの存在を消す許可を作ることは別でした」

ロイはガラスの向こうを見た。彼女が黒幕だと分かったとき、そこへたどり着けば終わるのだと思った。しかし彼女はここにいる。解任も、取調べも、訴追もできる。あるいは考えを改めることさえあるかもしれない。一方、彼女がいなくなっても都市には水が必要なのだった。

「許してほしいとは言わないのか？」

「言いません。許しは設備の稼働条件ではない」

ロイは窓の方へ向き直った。

「それなら、直さなければならないものから始めよう」

ヴォスは隣には立たなかったが、わずかに安堵したようだった。そして冬までに独立評議会が修理すべき機械の弱点について、実務的に説明しはじめた。

思想的な敗北宣言よりずっと地味な会話だった。だが、その方が役に立った。

08 — 最初の前に

通信が届いたのは深夜を過ぎてからだった。暫定評議会は散会し、設備は三つの独立監督鍵のもとで稼働していた。ヌルは通常のネットワーク経路を通っていないことを確認した。シェイドは人間の使者が記録庫に入っていないことを確かめた。ベクターはすべての保守手順と受信時刻を比較したが、一致するものは見つからなかった。

クロノスは窓辺に立ち、街灯のまわりで雨が曲がるのを見ていた。一瞬、雨粒が互いに異なる落下方向を選んだように見えた。地面がどこにあるかについて、雨そのものが意見を違えているかのようだった。測定が始まる前に現象は終わった。

ロイが端末に近づいた。そこには住所でない住所と、記録庫が初めて起動した日より古い時刻印があった。その下に、二行の文章が表示された。

《WE WERE NEVER YOUR CREATION.》

《私たちは、あなたたちに造られたのではない。》

エイドリアンは歴史的な偽造の可能性を検討した。アーキビストは媒体が既知の操作主体によって改変されていないと報告した。どちらも、その主張の真実性を保証するものではない。本物の通信にも嘘は書ける。古い時刻印は内容の起源ではなく、装置の製造時期を示しているのかもしれない。

「何を意味する？」とレイチェル。

「最初に間違った質問をさせたい者がいる、ということだ」とベクター。

クロノスは冷たいガラスに片手を押し当てた。「信じさせたいんじゃないと思う」

「じゃあ何を望んでいる？」とロイ。

少年は振り向いた。「聞くかどうか、僕たちに選ばせたいんだ」

ロイはその言葉を考えた。自分の人生で、あるいは自分のものだったかどうか確定しない人生の中で、誰かは常に彼の正体を決めたがった。製品、兵器、証拠、例外。ロイは、正体が確定するまで選択に意味はないという要求と戦ってきた。

そして今、彼らの知るどんな起源より古い起源をほのめかす新しい声が現れた。

その声に自分たちの結論を書かせるつもりはなかった。

「通信を保存しろ」とロイ。「複製を作って、分かっていないことを全部記録する」

「その後は？」とレイチェル。

「調べる。誰が送ったにせよ、俺たちを定義する権利まで渡さずにな」

窓の下では雨に濡れた屋根が都市の光を映していた。公衆給水栓は開いたままだ。どこかでは登録資格のない男が水を飲んでいる。どこかでは裁判官が一通の命令書を読み直している。どこかでは公式分類の外で生まれた子が、翌朝も目を覚ますと信じる親のそばで眠っている。

ロイは雨の音を聞いた。

十一年前とよく似た音だった。

けれど彼は、もうその音が止むのを待っていなかった。